

2020年度オンライン授業実践報告： 今後の英語教育を考える手がかりとして

大橋 稔

はじめに

2020年度の授業は、オンライン授業という今までに体験したことのない状況で実施され、通常では体験することのない経験を多くの教職員に強いた一年であった。しかしその一方で、通常とは異なる状況下で授業を実施するということは、授業とはそもそも何なのかという根本的な問いを改めて考える機会であった。本報告では、この間に考えたこと、感じたことを羅列的にまとめながら、今後の語学教育センターにおける英語教育の方向性についての私見をまとめることにしたい。

I. 授業を構成する要素とは

前期の必修英語の授業を実施するにあたり、語学教育センターでは共通教材を用いたオンデマンド型の授業スタイルを選択した。それに伴い考慮しなければならなかったのは、オンデマンドというスタイルを授業として成立させるために何を含まなければならないのかということだった。多角的な検討を経て抽出された授業の要素とは概ね下記A.～D.の4つの内容に分類された。またそれぞれの内容を実現するために作成したのが下記1.～10.の10種類のコンテンツだった。

A. 知識の伝授	1. 予習課題 2. 講義動画	8. 統一課題 (含、復習問題)
B. 修得した知識の確認	3. 復習問題 4. 練習問題 5. 確認問題	9. 練習問題 10. 確認問題
	6. 書き込み課題	
C. 学生と教員との間の双方向のやりとり D. 学生が共に学ぶ環境	7. 質問箱	

「1. 予習課題」と「8. 統一課題」は、基本的に毎回の授業のテキストにあたり、学生には講義動画を視聴する前に実施することを求め、その内容について「2. 講義動画」で説明を行った。これらが「A. 知識の伝授」に当たるものとした。「3. 復習問題」は講義内容に基づく演習問題で、紙ベースの自学問題とした。なおここには解答は示されておらず、WebClassの自習機能を用いた「4. /9. 練習問題」(基本的な内容は復習問題と同一)を行うことで、復習問題の解答を確認できる仕組みにした。なお練習問題は何度でも解くことが可能であり、学生は全問正解を目指し繰り返し挑戦できる課題であった。最後にWebClassの試験機能を用いた「5. /10. 確認問題」で習熟度の確認をした。確認問題については確認テストの意味あいがあるため、学生が挑戦できるのは1回のみとした(正確には複数回受験可能な設定とし、学生の通信環境へ配慮した)。復習問題から確認問題が「B. 修得した知識の確認」として位置づけた。また「6. 書き込み課題」では、学生が講義動画の中で課題として提示された英作文に取り組むもので、修得した知識の確認としての意味合いをもたせた。

しかし書き込み課題を設定した最大の理由は、「C. 学生と教員との間の双方向のやりとり」を確保することであった。学生が提出した課題に対し、担当教員がコメントや、正解へのヒントを示すなどして、双方向のコミュニケーションの機会を確保できるようにした。またこの課題はWebClassの掲示板機能を用いた。その理由は、他の学生の課題の内容やコメントの内容を確認できる状況を作ることで、「D. 学生が共に学ぶ環境」を作ることになると考えたためだ。また同様の理由から「7. 質問箱」も掲示板機能を用いて作成した。

このような授業の方法について学生の反応については後述するが、「授業とは何か」という根本的な問題と改めて向き合い、必修英語を担当する者同士で共有することができたことは、教員として意義あることだった。

Ⅱ. 後期授業での取り組み

後期は必修英語の授業も担当教員によってそれぞれに実施された。ここでは自身の取り組みについて紹介する。

後期必修英語の授業¹で採用したのは、Zoomを用いたリアルタイム型のオンライン授業スタイルだった。1回の授業の構成は、Zoomを用いた授業と、その前後に行う予習課題と復習課題とした。予習課題と復習課題はWebClassの自習機能を用いた10問程度の確認問題である。自習機能を用いた場合、学生が自分で課題の正答を確認することができる。またその確認方法については、すべての正答を確認できる方法と、正解したもののみ確認できる方法とを教員が選択することができるが、今回は後者を選択した。また何度でも挑戦することができるようにした。これにより学生は、

満点を取るまで繰り返し受験することを可能にした。

さて実際のZoomを用いた授業だが、ブレイクアウトルームを使用した構成と、使用しない構成との2種類で実施した。ブレイクアウトルームを使用した場合の概ねの構成要素は、「①教員による全体に対する説明」「②ブレイクアウトルーム内でのグループワーク」「③グループワークで解決できなかった点に関する質問」「④教員による全体への解説」「⑤授業のまとめ」の5つである。なお②～③については数回繰り返されることになる。②のグループワークを実施している間、教員は各ルームを訪問し、状況を確認し、必要に応じてヒントを与えたり、質問に答えたりした。また④の解説に時には②と③で疑問は解決していることが前提になるので、学生を指名し質問に答えてもらいながら展開した。

一方、ブレイクアウトルームを使用しない場合は、「①教員による全体に対する説明」「②問題演習」「③教員による全体への解説」「④授業のまとめ」の4つが授業の基本的な要素であった。②と③は数回繰り返されることになる。②で学生が導き出した答えの確認については、③の時に「1) 指名で答えてもらう」「2) チャット機能を用いて答えを送信してもらう」「3) 選択問題の場合は投票機能で送信してもらう」などの方法で行った。チャットで答えを送信してもらう場合、教員のみを送信してもらうようにした。その目的は、間違えることに対しての心的な負担の軽減と、他の学生の回答を写して提出することを防止することであった。チャットで送信された答えの中からいくつかを選んでコメントを付したり、投票結果を共有しながら解説したりすることで、学生同士が共に学ぶ環境を提供できるように心がけた。

Zoomを用いて授業を行う場合、通常の前で行う授業にある程度近づけた形態で授業を実施することができた。またこれは必修科目以外の授業でもそうであったのだが、全体に向けて説明等を行う場合は、つねに白紙のMS Wordを共有した状態で行い、黒板の代わりとして用いた。PowerPointなどの使用も試みたが、授業中の使用において最も使い勝手が良かったのがWordであった。また授業終了後、そのまま保存することができたのは、進捗状況の確認をするためにも有益だった。

しかし通常の授業のように進行することができなかったことも幾つかある。そのひとつは、ペアワークであった。ブレイクアウトルームを用いれば技術的には問題なく実施することは可能だった。しかしパートナーが積極的に発言しない、ネット環境などの問題によりペアワークに参加できないなどの問題が発生した場合、もう一方の学生は無益な時間を過ごさなければならないことになる。もちろん教室内での授業であったとしても、ペアワークに積極的に参加できない学生はいる。しかしそのような状況は対面であれば簡単に発見し、何らかの対応をすることが可能であった。しかしオンライン授業ではそのような状況は、そのルームに参加しなければ教員側で把握することができないのが現状である。このような問題を回避するためオンライン授業で

は、ペアワークではなく最低3名以上のグループワークとしてペアでの発音練習や会話練習を実施することにした。

また学生の表情を見ながら理解度を確認し、繰り返し説明をしたり、説明を簡略化したりするという調整はほとんどできなかったことも、対面授業とオンライン授業との大きな違いであった。この点については、教室での授業時よりも頻繁に、質問があるかどうかを問いかけ、質問ができる状況をより多く提供することで対応するように努めた。このことは、当初のスケジュール通りに授業を展開するという点においては利点であったようにも思われる。事実、基本的には予定通りに授業を進めることができた。しかし英語に苦手意識を持つ学生が多い状況のなかで、学生のリアルな反応を確認できない状態での授業展開が正しかったのかは疑問が残る。

選択英語科目²やゼミなどの演習科目³では、TeamsやZoomを用いたオンライン授業と教室内での対面授業とを併用したハイブリット型の授業スタイルだった。授業実施において特に考えたことは、教室内での授業をオンラインで配信するのではなく、オンラインでの授業を教室に引き込む方法だった。具体的には、Teamsなどで展開されているオンライン授業を教室内のプロジェクトを通じて対面の学生と共有した。語学の授業やゼミ科目には、ペアワークやグループワークなど、発声を伴う活動が多数含まれる。その活動を円滑に教室内で実施するためには、学生同士向き合えないようにする、大声にならないように注意するなど、さまざまな制約が伴う。グループワークなどの活動に教室の中からもオンラインで参加することで、それらの制約を乗り越えることを意図していた。

しかしこの方式については、学生から対面で授業に参加するメリットがほとんどないとの意見が寄せられたため、修正が必要になった。そこで全体に対する説明などはTeamsなどを通じて行うことを主としたまま、グループワークは教室内のグループと、オンラインのグループでそれぞれ行うようにした。教室内のグループワークでは、LL機材を活用した。これにより学生間の距離を十分に保ちながら、かつ大声にならずグループワークを行う環境を提供することができた。また学生が互いの顔を見ながら活動できるという、ある程度の自由も確保することができた。

グループワーク実施時は、オンラインの各グループを訪問するのではなく、教室内のグループに参加し質問への対応やコメントを行うようにした。これにより多少なりとも、対面での授業に参加するメリットを感じてもらえるようにした。またグループワーク後には各グループの代表に成果を発表してもらうことで、グループワークの取り組みを評価するようにした。

ハイブリット型の授業スタイルをとった場合、完全オンライン型とは異なり、多少なりとも学生の反応を確認しながら授業を行うことができた。この点において教員にとってのメリットはあったように思う。しかし学生の視点に立った場合、学生の主体

的な活動が不可欠であり、またそれを期待して参加したにも関わらず、その活動自体が制限されてしまう授業スタイルは、どれだけ魅力あるものであったのかは定かではない。またLL教室という機材が整った状態で活動の幅をある程度確保したわけだが、通常の教室でどれほど確保できるのかは今後丁寧な検討が必要である。

最後に講義科目⁴ についてであるが、Zoomを用いたリアルタイム型のオンライン授業スタイルを用いた。1回の授業は、事前学習、Zoomを用いた講義、事後学習を基本要素とした。事前学習では、WebClassで事前配布された資料を読み、あらかじめ与えられた質問について自身の考えをまとめることを求めた。講義では話を聞くことが基本となるが、毎回グループディスカッションと代表のいくつかのグループにディスカッションの結果についての報告を求めた。なおディスカッションの内容は、事前学習で与えられた質問に関連した内容をテーマにした。また事後学習ではいわゆるレスポンスシートをWebClassを通じて提出してもらった。なおレスポンスシートでは、「1) グループディスカッションの内容のまとめ」「2) 講義で紹介したキーワードに関する説明」「3) 講義の感想、講義で見出したこと」「4) 質問など」の項目についてまとめてもらった。

講義科目という授業形態のため、学生の発言の機会は非常に限られ、学生は受動的な受講形態にならざるを得ない。しかし科目の性質から、授業を受け、自身の問題としてさまざまな課題を理解してもらう必要があることから、事前学習、事後学習の内容を工夫することで、少しでも主体的な態度で授業に参加することを促した。また通常の授業時においてもグループディスカッションは毎回取り入れていた。しかしオンラインという顔の見えない状態で、学生がどれだけディスカッションに積極的に取り組むことができるのか疑問に思っていたため、前期の授業ではディスカッションは取り入れないことにした。ところが受講生から、「他の学生の考えも知りたい」との意見が寄せられ、途中からグループディスカッションを取り入れるようにした。またその経験から、事前にある程度考えをまとめることができた方が、より積極的に発言できるように感じたので、後期からは事前学習で資料を読むだけでなく、具体的な質問を与え、それについても自分の考えをまとめてもらうようにした。

英語のオンライン授業では、学生の顔が見えないことが難点であり、学生が対面授業時よりも遠くに感じるが多々あったが、講義科目においては、むしろ逆でより近くに感じるが多かった。対面時では、ディスカッションの報告をしてもらうとき、学生が話し始めるまでに時間がかかるのだが、学生同士で顔が見えていないためか、オンライン授業では多くの学生がすぐに話し始めてくれた。また講義中にも、チャットを使って「今の説明をもう一度繰り返してください」「それは〇〇という理解で良いですか」などの質問をする学生も多かった。またオンライン授業では、授業を5分程度早めに終わることを心がけ、個別で質問があれば声をかけてもらうようにし

ていた。ここでもほぼ毎回、学生から「今回のテーマについて自分は〇〇だと考えるが、それは正しいか」など質問が寄せられた。

Ⅲ. 学生の反応

毎年、期末試験と同時に授業評価を学生にしてもらっている。そこでは「授業を受けるために何を頑張ったか」「授業や教員に対する意見や感想」の2点を答えてもらっている。なおこの授業評価は記名式で実施するが、語学教育センターとして行う無記名の授業アンケートに影響が出ないように、アンケートより遅く実施するようにしている⁵。ここで書かれた評価から、今後の改善点を考えたい。なおここでは、必修英語に対する評価を中心に扱うことにする。

まず前期のオンデマンド型の授業について簡単に見ておきたい⁶。オンデマンド型の授業で評価が高かったのは、「自分の都合の良い時間に受講することができて良かった」というものだった。一方、評価が低かった意見としては、「動画の視聴記録が正確に記録されなかった」のような使用したプラットフォームに関するものがあった。他には「課題が多すぎる」「質問の仕方がわからない」などもあった。また「どの課題をしなければならないのか分からない」というものもあった。

オンデマンド型を採用した場合、リアルタイムで学生と直に話す機会はほとんどない。そのため学生のやり取りは、メールなどの文字情報あるいは、動画での一方的な語りかけに限定されてしまう。丁寧な説明を心がけてきたつもりではあるが、教員が考える以上に丁寧な説明が必要になることが、この経験から分かった。そもそもWebClassの各コースには授業ごとに質問箱を設置しているため、「質問の仕方がわからない」という評価が出るとは全く想定外のことだった。

また授業として提示している課題について、「どの課題をしなければならないのか分からない」という意見が出るのも想定外のことだった。受講方法については、第1回の講義動画で説明したほか、適宜お知らせの文章を作成し、数回にわたって周知を行ってきた。またこの意見は裏返せば、「やらなくても良い課題がある」と考えていることを意味するわけだが、「やらなくても良い課題がある」と学生が考えるとは全く想定していなかった。繰り返しになるが前期授業の経験から、今後オンデマンド型の授業スタイルを採用する場合、教員が想定する以上に丁寧な説明と、おそらく毎回、どの課題をどのように行い、どのように提出するのかといった説明を行う必要があるだろうことがわかった。

さて後期授業についてだが、評価が高かった点としては「ブレイクアウトルームの利用が良かった」というものが多かった。この理由の背景には二つのポイントがあった。一つ目は、オンライン授業という環境の中、別の学生と知り合い話す機会になっ

たので良かったというもの。もうひとつは、授業中に指名される前に一度、学生同士で問題の内容を確認することができたので、指名されても緊張せずに答えることができたというものだ。特に後者については、学生にとっては「苦手な英語」の授業に出席しなければならないという心的ハードルを下げるのに役立ったようである。

しかしブレイクアウトルームについては、「時間の無駄だった」という低い評価もあった。前述のように、ブレイクアウトルームを実施している間、学生がどのような活動をしているのかは、それぞれのルームに入らなければわからない。事実、ルームを巡回すると、積極的に議論しているグループもあれば、全員がマイクをオフにしたまま静まり返っているグループもあった。そのような場合は、積極的に声をかけるなどしてグループワークを行うように働きかけをしたのだが、そのルームを離れた後の状況について確認する術がなかったのも事実である。また別の学生は、「ブレイクアウトルームの活動の時、反応しない人がいて困ったが、みんなで話し合いができるように努力した」といった意見もあった。対面の授業であるならば、グループ活動が苦手な学生には個別の対応をするなどの働きかけを行うことができる。しかしブレイクアウトルームは教員からは見えない空間でもある。今後、ブレイクアウトルームを使用するさいには、グループ活動が苦手な学生への働きかけの方法について考えておく必要があるだろう。

別の高い評価としては、「予習課題や復習課題があり、自分がやるべき課題が明確だったので良かった。また結果として予習をして授業に参加することができた」という評価があった。この評価はほぼすべての必修英語のクラスで複数の学生によって書かれていた。しかしこの評価は意外なものであった。むしろ「やることが多くて大変だった」のような否定的な評価になるのではないかと、前期の評価を考慮して思っていたからだ。このことから、課題を明確に提示し、それを学生が理解することによってしっかりと取り組むことができることがわかった。このことから、対面オンラインの違いに関わらず、丁寧な課題についての説明が必要になることがわかる。

またこの予習課題、復習課題については、「公開されるのが遅すぎる時があった」とのお叱りもあった。当然のことではあるが、学生の学習環境を整える意味からも、教員自身が時間管理を怠ってはならないことも今後の自身の課題である。

授業の進み具合については、概ね「丁度良い」との評価であった。しかし少数ではあったが、「ペースがはやすぎる」との評価もあった。対面授業であったとしても、すべての学生に「丁度良い」と評価される進度で授業を行うことは不可能に近い。それでも常に学生の理解度について確認することを怠ってはならず、学生の表情や授業への取り組みなどを通じて把握するよう努力している。しかしオンライン授業においては、学生の表情などから学生の理解の状況などを把握することはより難しい状況になる。よって対面授業の時以上に、丁寧な確認が必要になるだろう。またその確認方

法もオンライン授業という形態に即し、課題の取り組み状況など、対面授業時とは異なる方法を考えておく必要があると思われる。

まとめ：今後の課題について

ここまで2020年度のコロナ禍という非常事態における自身の一年間の授業実践について振り返った。最後に、今後の課題についての私見をまとめておきたい。

2021年2月、学長と教務部長の連名によってシラバスの作成に関する文章が発出された。そのなかで、今後の授業に「①学生の主体的な学びを促進する取り組み（アクティブラーニング）を取り入れること」「②形成的評価を積極的に取り入れること」など、6点が求められている。これまで語学教育センターの取り組みとして、さまざまな努力してきた点と重なる点が多いが、今後は更なる努力が必要になる。

特に授業実践として、双方型のコミュニケーション型授業となることについては注力してきたところである。しかしその一つの実践方法として考えられるWebClassのようなICTを活用することについては、いささか後ろ向きであったことも否めないと思う。その一方、この一年間を通じてWebClassなどを活用した授業が強いられたことで、WebClassなどを活用した授業が学生の主体的な学びを促す可能性を実際に体験することができた。またWebClassを活用する技術を少なからず学ぶこともできた。この経験を活かしながら、より効果的なWebClassなどの活用法を模索し、継続した活用が必要になるだろう。

「教科書と辞書があれば何とか授業は成立する」との考えに安住し、また「対面での授業こそが語学の授業」と考えていた自分にとって、WebClassのようなツールを取り入れることは精神的にも高いハードルであった。また今年の経験から、WebClassなどの使用を継続することは、仕事量が増加することだということも明らかである。しかしこのことを仕事の増加として捉えるのではなく、学生の学びの機会を増やすことだと前向きに捉えていきたい。WebClassなどのツールは、学生が自身で学習記録を確認することを可能にするだけでなく、教員にコンタクトするツールを確保することでもあるからだ。またそれは学生の可能性を増やすことであり、授業の中だけでは見つけることができない学生の新たな側面を発見する機会を増やすことでもある。

2020年度は、実際に対面での授業をすることができないからこそ、対面での授業の大切さを実感した一年でもあった。この思いを継続させながら、対面であろうとオンラインであろうと、いかなる状況においても学生の顔を見ながら授業を行うことができるよう、自身のスキルを向上させる努力を継続させていかなければならないと考えている。ありきたりではあるが、コロナ禍という非常事態における一年間の経験

は、教員という仕事と役割に関する精神的な側面を何よりも鍛えさせてくれたのだと
思いたい。それが2020年を転換の年としてポジティブに思い返すための唯一の方法
なのだと思う。

《注》

- 1 担当したのは、「コミュニケーション基礎英語B」(EE, ZM, SM×2) 4クラス, 「コミュニケーション基礎英語D」(EE) 1クラス, 「コミュニケーション基礎英語B, D」(再履修) 1
クラス, 「コミュニケーション英語B」(ZM) 1クラスである。
- 2 担当したのは、「英語集中トレーニングIB」(週2回実施の授業) 1クラスである。
- 3 担当したのは、経済学部「フレッシュマンセミナー」「ソフォモアセミナー」「ゼミナ
ールI」の各1クラスである。
- 4 担当したのは、「女性とダイバーシティ (女性の働き方)」(全学部対象) の1クラスである。
非常勤先で担当した「女性学」1クラスも同様の授業形態で行ったので、この経験について
も含めて言及する。また前期には同様のスタイルで「ジェンダー論I」(TB) 1クラスを担
当した。
- 5 2020年度については、センターのアンケート実施時期が例年より遅かったため、同時期で
の実施になってしまった。
- 6 前期授業についてはセンターとして独自のアンケートや、個人として実施している授業評価
は実施しなかった。そのためここで紹介する学生の評価は、全学で行ったアンケートと、学
生との個別のやり取りの中で聞いた内容に基づいている。